

『存在と時間』 (Ⅱ)

——時相存在論の根本視座——

竹 田 寿 恵 雄

第一部 存在の現象学

第一章 存在の確固性—大地

(1)

存在はどのように現象するか。既に述べたように、存在は決して抽象的思弁的に実存に理解されたものではない。抽象的な一般普遍的概念として把握されているのではない。存在は実存に気分的に色付けられて了解されている。この実存に気分的に了解されている存在の諸相を、その了解されているままに叙述するのが存在の現象学である。存在は実存に現象している。具体的に実存の生において了解されており、これが即ち存在の現象である。存在は実存に隠されているもの、これから論理的観念的に追求されるべきものではなくして、存在は既に実存に露呈しており、自己を実存に了解させているのである。我々はこの実存の生において露呈されており、実存に気分的に了解されている存在の現象形態を、そのあるがままの相において記述しなければならないのである。

存在はどのように実存に了解され、現象しているか。存在は、在ることとして、存在する者、即ち存在者をして在らしめるものとして、存在者を支持し、保持しているものとして、先ず『大地』として現象している。大地 *der Boden*こそは実存を支え、すべての存在者を保持するものとして、実存に了解されているのである。

(2)

既に述べたように、実存とは決して宙空に浮んだ心霊的存在ではなくして、身体性を持った、生きている生の主体である。この実存の身体性は、実存の根本的規定であり、実存の存在了解をば根源的に規定しているものである。即ち実存の存在了解には常に身体性が射影されており、実存はこの身体性という実存の根本規定によって、存在了解をも規定されているのである。

ここで筆者は少しく身体性につき述べておくことにしよう。身体性を持つということは実存概念の根本的要素を成している。これによって実存概念は先験的主観とか精神とかいうような観念的主体概念から自己を峻別するのである。実存は決して脳髓無き個性無き主観ではなくして、まさに身体をもった具体的生ける人間存在である。身体性は実存成立の原点である。

しかしこの実存の身体性 *Körperlichkeit* を、ただちに人間の肉体性 *Fleischlichkeit* と同一視してはならない。身体性は肉体性よりも広い実存論的概念であるが、肉体性は生物学的

医学的自然科学的人間考察に基づくものである。この両者を混同し、同一視するところから、例えば唯物論哲学と実存哲学との相違が生じて来るのである。

人間が生物として肉体を持っていることは争う余地もない事実である。しかしこの肉体は人間存在そのものと同一であり、謂わば外延的肉体の大きさが即ち人間の自己性の外延と相覆っているのであろうか。例えば一人の人間が腕を一本手術により取り去ったとする。この人間は確かにその肉体性においては通常の完全なる肉体を持った人よりも、その一部即ち腕に関して欠損を持っている。確かに彼は腕が一本しかないことによって肉体性において欠如している。しかしその事は彼の人間としての存在、彼の自己性に関しては何らの欠損、欠如を意味するものではない。彼の実存は腕の欠損によっても何らの影響をも受けていない。人間存在が肉体の上に成立していることは確かであるが、肉体性は必ずしも人間存在の実存性には関わりを持っているのではない。医学が進歩して来ると我々は肉体的腕の代りに義手をつけた人間、肉体的足の代りに義足をつけた人間を見ることが通常となってくる。しかし我々はこのような義手義足をもって肉体的欠損を補っている人でも、その人が人間存在としての、実存としての欠損を持っているとは考えることはできない。医学がさらに進歩すれば何時の日にか我々は、心臓の代りに人工心臓をその胸部におさめ、腎臓の代りに人工腎臓をもって代用し、義眼、義歯をはめ、プラスチックを移植して皮膚を整形した人間、種々の謂わば部品をもってその肉体性の欠損を代用した人間、このような人間も存在し得るようになることも想定できる。この人間の肉体の各部分には多分に、金属性或いはプラスチック性の物体によって補充されている。しかしこのような人間でも我々は彼をロボットと呼んで良いであろうか。彼がもはや人格ある人間存在ではなくして、人工人間、ロボットに過ぎないと見做して良いであろうか。そのようなことは決して許されることではない。彼の肉体性には欠損があり、その肉体性は多分に物化する存在者によって補充されていても、なお彼自身は決して物在者 *Vorhandenseiendes* ではなくして、まさに人間存在であることに変わりはない。肉体性は確かに生物としての人間を構成しているが、その実存としての存在、実存性そのものを構成するものではない。

肉体性が人格的人間存在の根柢にもっとも強く肉迫し接触するのは脳である。四肢や体内の諸器官よりもっとも人間存在の成立の根柢に触れるものとして、我々は脳の存在を考えざるを得ない。確かに脳の欠損、破損は人間存在の根本をゆるがすものであり、人間の人格的存在を脅かすもっとも恐ろしい障害である。この場合、脳の一部分の損傷はまだ人間の人格的存在を破壊し去るものではない。例えば脳の一部としての運動神経を司さざる部分が破損しても、そのことによって人間は決して人格的破滅を受けるものではない。彼がたとい身体障害者としてその四肢の運動が不自由であっても、彼の人間存在としての価値は毫も欠損を受けないものではない。しかし人間が脳の重要な部分或いはその大部分を破損した時、例えば狂人となり、意識を失ない、狂暴な人間となり、または白痴となる、このような場合、彼らはもはや人間としての存在を否定されるべきであろうか。癲癇の発作を起して倒れ泡をふき意識を失っている人、或いは薬物や水銀中毒によって脳組織を破壊され、謂わば生ける屍ねとなっている植物人間と見做されるような人、このようなものはもはや人間存在ではないであろうか。否、このような人もまた一個の人間存在であり、そのような子供を持った親の眼には愛しく哀しい人間存在なのである。哲学はこの親の涙を見逃してはならない。哲学はこの親の心の痛みを充分に了解する哲学であらねばならない。この心の痛みにおける存在について

ては我々はさらに後になってもっと突っ込んで考察するであろう。我々はそこで存在概念のさらに拡充された意味を見るであろう。

我々は狂人でさえ、植物人間となった病者でさえ、一個の人間存在として把握しなければならぬ。実存とは決して理性的存在でもなく、総明にして常識を持った正常人のみを意味するのではない。病める者、狂える者、それもまた実存なのである。脳細胞の一部の破損も、大脳皮質の一部の欠損も、決して人間存在の実存性を破壊し去るものではない。根本的に言えば、人間の肉体性は決して人間存在の本質的要素を成すのではないのである。そして十八世紀フランスの唯物論に代表されるような、人間存在のすべてを肉体性に還元し、さらに人間存在を唯物的に把握しようとする唯物論哲学は、ここにその誤まりの始源を持っているのである。分量的外延的物質的肉体性は、決して実存を構成する本質的要素ではないのである。唯物論は人間を実存として理解することができない。唯物論は人間存在における悲痛さや喜びを、つまり実存として生きる人間を知らない。しかも一方では唯物論の国においても、戦没者の慰霊碑が立てられ、遺体が、物体と化した管の遺体が大切に保存されたりするのである。遺体はまさに人間存在であったことにおいて意味を持っている。人間存在(実存)の遺体として意味を持つのである。ロンドンのろう人形館におかれた偉人の像には誰も頭を下げることにはしない。しかし人の遺体には人は頭を下げ得るのである。

(3)

人間における肉体性を人間存在の本質的要素と見ないことは、しかしながら他面において人間を単に理性的観念的精神的存在としてのみ見る誤まりを犯すことになり兼ねない。観念論的精神哲学や、中世のキリスト教神学の人間把握はこうした誤まりを犯したものである。それは人間存在として全く身体を有さない、或いは身体は全く人間存在にとって本質的でないところの無視して良い部分と見る、観念論的或いはキリスト教の人間理解となってしまふ。ここでは理性と心情は分離され、霊と肉体は峻別され、唯精神的靈的存在として人間が理解される。

実存哲学はこの誤まりを犯さないために、実存における身体性の重要さを指摘するのである。身体性は肉体性と同一ではない。肉体性は人間存在を自然科学的生物学的に見たものであり、人間存在を量的物質的に規定しようとする概念である。しかし実存としての人間存在は単に物質的分量的にのみ規定され得るものではない。謂わゆる人間の精神的活動の内容は、唯物論の言う如く物質的分量的に規定されるものではない。確かに意識は大脳皮質においてその座を見出すように見えるが、しかも意識内容はその外延的な規定としての大脳皮質に還元され得ないもの、そうした物質的規定を超えたものを持っている。我々はいかに大脳皮質を科学的に分析し、その化学的成分をレトルトにかけて分解分析し抽出してみても、意識内容は募も導出することはできない。いかに医学的に大脳の働きを分析し、例えば脳波に客観的に書き出してみても、その人間が今7+5を、12と見ているか、13と見ているかの判定はできないのである。意識内容、思想内容は量的に物質的に、即ち唯物論的に規定し得ないものである。肉体性はこの量的物質的規定において人間を見た概念である。しかるに身体性とは実存の存在規定の質的全体的概念の一つである。身体性は一本の腕、一本の足、一つの心臓というように量的に実存を規定するものではない。人間の部分を総計し、量的に烏合的に集めてできた概念ではない。それは現実的に存在する実存の全体的規定である。一本の腕

を失なうことはその人間の肉体性における欠損である。しかし身体性においては何らの欠損を意味するのでもない。それによって全体としての実存は豪も減少したり欠如したりするのではない。実存は自己として存在する。しかしこの実存の自己性は肉体性においてのみ成立するのではない。肉体性において人間が腕を一本損傷し、足を一本失っていてもなお彼は自分の存在を保持する。しかし最後に彼が脳に破損を受けた時には彼は自己として存在しないように見える。事実狂人や意識を喪失した者は、もはや自己を認識し得ないであろう。しかしそれにもかかわらず、実存としての狂人は自己を喪失したのではない。彼は自己を喪失し自己を放棄する者として、なお自己を保持している。彼が身体性を有している以上、彼は彼でなくなったのではない。死において彼は自己を完全に喪失する。彼の身体性は死と共に消滅する。彼は全体として一個の実存であることを放棄する。しかし身体性を持っている以上は、狂人も病者も実存として自己を保持している。

身体性は実存が決して単なる宙空に浮いた心靈的存在ではないことを示す根拠である。しかしさらに重要なことは身体性が、実存が単なる思惟する自己、コギトーの主体としての自己であるのみならず、感じ、意欲し、気分的に規定される実存である一つの根拠でもあることである。実存が身体を持っていることに、実存が気分的存在である大きな一つの根拠がある。さらに身体性は、実存が決して超越的的存在ではなくして、有限なる存在である根拠の一つとなっている。有限性ということは実存規定の一つの大きな実存瞬であるが、それは身体性を持っていることが大きな根拠になっているのである。身体性を持っていることは、実存が永遠に存在し得る存在者ではなくして、死すべき存在者であることを意味し、そして死はまさに実存の有限性を意味するのである。死 Tod は実存瞬としての身体性において成立する。肉体性においては単なる死亡 Sterben が理解されるに過ぎないのである。動物はその肉体性において死亡し死滅する。しかし実存はその身体性において死するのである。この問題はしかしさらに後において死と実存の自己性、自己同一性の問題の考察によって考えられねばならない。

(4)

ところで実存の身体性において極めて大きな特長的規定は、二本の足で立っているということである。即ち実存は自己を「立っている者」として自覚している。立っているということは人間の実存の最も大きな特徴なのである。そしてこの「立っている」者としての実存は、立っていることを支え保持させているものとして、『大地』をして存在の根源的現象として了解しているのである。実存は、『大地』に立つことにおいて、その存在を何よりも先ず確実に了解しているのである。『大地』(der Boden)こそ、実存をして実存として保持し、生ける者として支えてくれ、何よりも存在するものとして規定しているものなのである。存在していること、それは即ち「大地に立つ」ことなのである。

もし人間が鳥の如く空を飛ぶものであったり、蛇の如し地に這うものであったり、あるいはまた犬の如く四つ足で立ち、腹ばいになって眠るものであったならば、実存の存在了解の形態は相当に異なったものとなっていたであろう。我々はこれらの諸生物の存在理解を知ることにはできないし、そもそもこうした生物は実存ではないのであるから、存在理解そのものがあるとも考えられないのであるが、仮定として、人間が空を浮動するものであったり、地を這うものであったり、または四つ足で立っているものであったならば、必ずやその存在了

解は我々とは相違したに違いないのである。しかるに人間はまさに二本の足で立ち、即ち手と足とが別の機能を持ち、上に手、下に足を持つことにおいて、まさに「立っている」存在者であることにおいて、その存在了解は規定されているのである。立っていることは、手を上にあげ、足を下に着けて、地上に立っていることであり、地上に自己を保持していることであり、それ故に実存は、自己を保持し、そして一切の存在者を保持し支えている基盤として、『大地』を了解しているのである。『大地』とはまさに存在の根源的源初的現象形態なのである。

それ故この実存論的に、実存論的存在論的に主題となっている『大地』が、決して地球を意味したり、単なる土地を意味しているのではないことは明らかであろう。物理的または宇宙天文学的に理解された地球や、生物学的化学的に理解された土地は、我々の主題としている『大地』とは全く相違した概念であり、それらは決して実存論的な気分付けられた「大地」という概念とははるかにへだたった概念なのであり、それは結局はこの実存論的存在論的な『大地』概念から、後から抽象的理論的に導き出され得るものではあっても、決してこの『大地』より以前に、即ち、それよりもより根源的な概念ではないのである。

それ故「大地に立つ」ということは、大地の上に自己を保持し、確固として保有すること (festhalten) であり、存在には常にこの確固としていること (Festigkeit) が含まれている。この確固性は実存がまさに大地に足をつけていることを根源としているのであり、大地の上に在ることなのである。この大地の上にあることにおいて実存は、自己を正しく保持し存立し得るのであって、従ってこの「上に在ること」はまた実存の根源的規定に属し、まさにそこから、存在が自己を下から保持し支えてくれることになる。この上と下ということは実に実存論的な根本規定であり、存在を全体的気分的に色付けているのである。実存が大地に立つということは、常に実存が大地の上に、上に向かって立っていることであり、大地は常に下に在って実存の存在を支持し基礎付けているのである。それ故に地球物理学的に事態を図示して、球形である地球上の一点に人間が立ち、その反対側の一点に逆に人間がまた存立している如き理解は、全く実存論的には無意味であり、不当な説明なのである。球形上の一点に立つ人間と、その反対側に立つ人間とが、例えば北半球上の人間と南半球上の人間とが、反対の方向に、従って一方が上に向いてならば、他方は倒さまに下に向いて存在しているなどと考えるのは、全く実存論的には馬鹿げた誤まった理解なのである。古代人達が地球を円形の平面においてのみ理解し、地球の図を決して球体として理解していなかったということ、従って現在の地球儀によって示されるような地球像を持っていなかったということ、これは地球物理学的に見れば幼稚単純なる神話的地球像であって、もはや現代の科学には全く受入れられないものであるが、しかもこの古代人の地球像は実存論的には全く正しい理解なのである。実存は常に、北半球の住人も南半球の住人も、常に大地の上に立っているのであって、決して逆方向に、大地の裏側に、転倒した方向において存在しているのではない。コロンブスが地球が球体であることを信じて、謂はば地球の裏側に、反対側に進んで行ったにしても、彼は常に大地の「上に」において進んで行ったのである。アニメーションふうに円形を画き、その円周にそって船がぐるりと一回転するように図示しても、それはコロンブス自身の実存の存在理解を説明し得ているのではない。彼自身は、あたかもサーカスのオートバイ乗りが円形に一回転する如く、またはジェットコースターの乗り物に乗った人が頭を下にして回転する如くに、スリルにみちた転回をしているとは考えずに、常に大地の上を廻っていると理

解していたのであって、逆転、転倒をしているとは理解していたのではないのである。それは常に大地の上に、重力の下に引く力とは逆に、まさに上向きに存在していたのである。

(5)

大地に足を接して立つこと、それは常に存在の確固性の根源である。航空機の中であって空飛ぶ人間が、その程度には相違があるにしても、何かしら不安定な、落ち着かぬ不安さを持つのは、それは彼がまさに「足が地に着いていない」からであり、そこから自己の存在の根柢に不安定さを感じるのである。存在は何よりもまず安定して在ること、即ち確固性 *Festigkeit* を持っており、そこから存在概念の静止性や不変性も導来されるのである。そしてこれらの存在観念の諸相は、その根源に大地に立つ実存の、『大地』という存在了解が潜んでいるのである。「私は大地に立つ」と人が言う時、そこには存在への確信と勇気、存在者を支える存在への信頼と希望が結びついているのである。

それ故「大地が揺らぐ」時、「足下が崩壊する」のを感じる時、大地を失っている時 (*bodenlos*)、実存は自己の存在そのものの崩壊への不安と恐れとを感得する。その時実存は、存在そのものが崩壊し、虚無の深淵に、暗い闇の奈落に、自己が落下する不安を抱く。実存は大地の確固性が崩壊して、闇へ、非存在へ、虚無へと自己が墜落する恐れを抱く。すべての実存論的な虚無への理解、闇への恐れ、そしてさらには宗教的な地獄への墜落、すべてこれらの実存論的存在崩壊の了解は、大地の上に立つ実存が大地の下に、大地の動揺と崩壊による大地の下への落下という生体験に基づいている。大地から下へ落ちることは、存在そのものの崩壊を意味し、実存そのものの絶望的な壊滅を意味してくるのである。「地の基、ふるい動く」(イザヤ書14:18)という表現の中には、実存そのものの崩壊、根柢としての存在の崩壊を示しているのであって、単に大地震とか、または原子爆弾による地上の破壊とか、地球上の物理的破壊を意味しているのではない。それは実存を支える大地としての「存在そのもの」の崩壊を意味しているのである。

このことからして我々は、「天と地」、「天国と地獄」といった宗教的世界解釈が成立する所以を知ることができる。しかしそれはもはや「存在の現象学」より、さらに「存在の解釈学」に移行した問題であり、後章において考察されねばならぬ問題である。

(6)

「大地」は揺がず確固とした支持者である。このことからして我々は存在を不変の静止の相において了解することになる。実に存在概念における第一の要素は、存在は不変であり不動であるという理解の態度である。もし人間が海上に、あるいは海中に浮動し遊泳する存在者であったならば、不動の存在、不変の存在という存在概念はできて来なかったであろう。絶えず動きゆらめくものの上に立つ存在者であるならば、その存在概念は我々の存在概念とは著るしく相違したであろう。しかるに人間はまさに大地に立った存在者である故に、存在への不動性の信頼とその不変性への期待を持つのである。存在とは在ることであり、静止し不変不動であることを、まず第一に存在概念の要素としてあげねばならぬのは、このように大地に依存して立つ人間の実存論的状况から由来しているのである。存在の根源的究極の形態として、「在りて在るもの」「かつて在り、今在り、また将来においても在るもの」という根源的存在者を考える時、何よりそれは不変の大地、揺がぬ大地への信頼が基になってい

るのである。思惟はこの実存の存在状況からして、抽象的概念的に、不変の静止としての存在概念を成立させてくるのである。

まことに「大地に立つ」ということは、実存にとっての希望の根拠であり信頼の根源である。実存は不動の大地に信頼することから、自己の存在を確保し、さらにはより上なる存在者への希望を抱くのである。即ち大地に立つことにおいて自己の存在を確保し、その上から天に向かって眼を向け、より上なるもの、より高きものへの希望を生み出してくるのである。希望と畏敬とは常に上なる天に向かっている。それはまず実存が大地に立っているからである。そこに我々は大地に対して「天」という存在概念を生み出してくるのである。「天」は存在を超えたもの、より高き目標であり、期待であり、畏敬の対象であり、憧憬の向かう先である。ここから存在の階層的理解、即ち「天と地」という二層的存在了解が生れる。さらにまた地の下、揺らぎ落下する先として地獄という存在了解が成立するのであるが、この存在の三層的理解については存在の解釈学の問題として取扱われねばならず、それは神話的存在解釈の問題となって考察されねばならない。

(7)

「大地に立つ」という存在了解は存在の確固性の根源である。そこから実存はすべての存在者を支持し、保持し、安定するものとして、すべての存在者を存在せしめる根拠として、存在の不動性、確固性を了解しているのである。この大地への信頼、この大地への存在者の依存性、それは何よりもまず実存の身体性において了解される。それ故実存はもっとも明確には、裸足で大地に立つ時、じかに、身体的に、大地の自己を支持していること、自己をして存立せしめていることを感得するのである。裸足でじかに大地を踏み立つ時、実存はまさに自己が存在していることを了解するのである。それ故大地への依存性と信頼性とは、実存の生活様式の変化によってまた変ってくるのである。即ち人間が靴をはき下駄をはき、或いは靴下、足袋等によって足をおおって、じかに大地にふれることが少なくなり、また他方において大地は舗装されたり人工的に覆いかくされて、人間の裸足とのじかの接触が消失してゆく時、実存の存在了解も変化してゆくのである。即ち実存は次第に「大地」というすべての存在者を支持し保持してくれるものを忘却してゆき、自己の大地への依存性、大地への信頼と感謝の念を薄らげてゆくのである。じかに直接的に身体をもって感得していた大地の恩恵と偉大さを忘れて、自己が自己だけで存立し、自己の存在だけが重要な関心事となってゆく。まして人間が自動車や船や航空機等の交通機関によって、自由に地上を動き廻ることができるようになってきた時、実存はもはや大地に支えられているという身体的感触を失ってゆき、それと共に存在の根源的な確固性と保持性、存在への依存性と信頼性とを薄めてゆく。ここからして存在への忘却、根源的なものへの忘却が生じてくる。実存が大地を忘れ、大地をうとんじて、ただ地上に動き廻る自由のみ享受している時、大地への感謝を忘れ、大地の恩恵を忘却し、そして存在そのものへの関心を消失してゆくのである。

(8)

大地ともっとも深く接触し、その恩恵を感得しているのは農民である。農民は大地にじかに接触し、大地を耕やし、大地に依存していることを忘れていない。それ故農耕文化には常に素朴な大地への感謝が含まれている。あらゆる宗教的行事、神事には、この大地への感謝

が含まれていることは宗教社会学や比較文化論の指摘するところである。しかもこの場合大地は生産を可能ならしめる根拠として、生産をなさしめるものとして、女性的に理解される。実存の身体性の一つの大きな要素である性が、ここでは大地に射影されて、「母なる大地」として感謝の対象となる。それは身体性を持った実存の、存在了解への一つの変様なのである。生み出すもの、支持し存在せしめ、そして生産させるもの、それが女性という性を射影されて、「母なる大地」への感謝となって現象するのである。まことに大地こそは生産の根源であり、また実存の存立の支えである。実存は大地から種々なる生産物を受取り、その生の支えを大地に見出す。かくして実存は母なる大地に感謝し、母なる大地に甘え、その懐ろにいこうのである。大地こそは実存の憩いであり、大地にあることにおいてその安定と安らぎとを得るのである。

大地に立たない者、大地を忘却している者は、実存の存在根拠、その支えを忘れる者であり、かくして実存は軽浮になり、また思いあがった僭越なる者となる。「足が地についでいない」者は、その思想において軽薄であり、または一人よがりの独断的な勝手な増上慢者となる。彼は自分で一人で存在し得るように錯覚し、自己を支え、自己を保持し、自己を根拠附けている者を忘却する。実存という存存者が、自己を存在せしめ、その存立を可能ならしめているもの、存在そのものを忘却する。大地として現象している存在そのものは、大地の恩恵を忘れると共に、存在そのものへの思念を忘却せしめる。その時実存は存在者の根源としての、存在者の根拠としての存在を忘却し、それと共に自己の存在の在り方に対しての反省と思惟とを放棄する。かくして実存は頹落し (verfallen)、自己そのものを喪失する。実存はその足を大地につけずして宙空に浮動し、不安定、不確定なる自己となる。

(9)

揺がざる大地、確固たる大地は、実存をして存在の不変性、不動性として了解せしめる。実存は大地を源初以来不変にして不動なるものとして了解し、従って大地とその上になるすべての存在者をして、不変不動に存在するものとして了解する。かくして存在とは不変にして不動なる静止の相においてまず了解される。存在するとは確固として不動に存在することであり、存在者の根拠、存在者を支えるものは変転せず、消滅せず、常に「在る」。このように我々は実存がこの大地とのかかわり、即ちその振舞いにおいて先ず存在を静止的な不動性、確固性において了解している姿を見ることができる。かくして存在は時間を超越し、時間に妨げられず、その不変なる静止性において了解される。たとい大地の上に立つ種々なる存在者が変転し、また消滅して行っても、それらの存在者を支え存在せしめたる大地そのものは、不変であり確固としている。かくして存在者を存在せしめている存在そのものは、常に不変であり不動である。たとい大地の一部、その地表、その突起、山脈や平野や丘陵が少しづつ変化して行っても、大地そのものは不変であり、実存の存在と共に常にそれを支えている。このように実存は大地に信頼し、大地に期待しているのである。

しかしながらそのように大地は不変にして不動なるものであろうか。実存は一方においては大地の不変性を信じながらも、他方においては大地の変転、その変貌を思わざるを得ない。即ち時間を超越している筈の不変不動なる大地に対して、なおもその時間と共にあり、時間において変転変化して行く相を思わざるを得ない。それは唯に大地の表面の変化のみではなくして、大地そのものの変転、移動、さらには何時の日にかにおける大地の消滅さえも予感

せずにはいられない。時間を超越している大地が、他面否定すべくもなく時間と共に在ることを認めざるを得ない。実存はこの大地の変転、さらには消滅すらも、戦慄をもって予感し、また感得する。それはまず大地におけるその変様として見聞され、現象する。「かつてはここに山なみがあったが今はもはやない」、「かつてはこの地は海であったが、今はもう山々となって隆起している。」そしてさらには、「かつては地上に大陸があり、王国が栄えていたが、今は海底に埋没し、また他の大陸へと移動し消滅してしまった」と実存は歎きをもって語る。かくして実存は信頼する不動なる大地に対しても、なおその不動性、不変性に対して不安を抱かざるを得ない。かくの如く大地も変転し消滅するならば、存在もまた時間と共に変転し変化するであろう。かくして存在は決して時間を超越せず、決して時間とは無関係ではあり得ないことを実存は了解しているのである。

確固たる不動不変の大地に対する信頼が、大地の変転移動の看取において一まつ不安により揺ぐ時、実存は存在の恒常性に対する非恒常性、即ち無常性、はかなさ、崩壊性を感得する。その時実存は、何が一体真の頼り得る存在か、何が真の根柢であるのかを思いめぐらさざるを得ない。そこからしかし存在の解釈学が展開する。存在の大地としての現象学は、また直ちに存在の解釈学へと移行する。何故なら実存とは、常に先駆し、思惟し、振舞って行くものだからである。だがこの問題は第二部において考察されねばならぬ問題である。

— (続く) —